

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 28 日現在

機関番号：25406

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24652169

研究課題名(和文) 日本文化における道教受容解明のための芸能に見る道教的要素の抽出

研究課題名(英文) Investigation of a Taoism-like element in the Japanese Performing arts to elucidate Taoism acceptance in Japanese culture

研究代表者

樹下 文隆 (Kinoshita, Fumitaka)

県立広島大学・人間文化学部・教授

研究者番号：70195337

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：日本には道教は正式には伝わらなかった。にもかかわらず、日本中世の文学・習俗・生活には長生・神仙・易学思想などに多分に道教的発想が認められる。本研究の代表者は、それらが古代から日本に伝わっていたものか、中世になって伝来したものかを解明しようとした。そこで、本研究では、基礎作業として、中世から近世にかけて生成・発展した諸芸能について、資料から道教的要素の抽出を行った。その結果、中世以降に発生した芸能に見られる道教的要素の多くは、古代から受け継がれたのではなく、中世に活発となった人的交流の結果によるものではないかとの見通しを得ることができた。

研究成果の概要(英文)：The Taoism didn't enter Japan formally. But Taoism-like idea is often admitted by the thought of longevity, fairyland and divination in medieval Japanese culture. We tried to do the following thing clearly. Are those the one brought to ancient Japan? Or are those the one transmitted to medieval Japan for the first time? So we picked a Taoism-like element out from material about the several Performing arts formed from the Middle Ages to the Edo Period. As a result, we could get the following perspective. In other words, medieval entertainment world can't take a seen Taoism-like element over from ancient society. Those are as a result of the people's exchange which became frequent in the Middle Ages.

研究分野：日本文学

キーワード：民俗芸能 古典芸能 道教 国文学 禅文化

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究は、研究従事者が長年抱いていた疑問の一つである、日本文化の基層に通底するある種の雰囲気をもどのように統一して理解すればよいのかを考える第一歩と位置付けられる。ある種の雰囲気とは、異界や神仙への憧憬、奇想天外な物語の筋立て、幽・冥の境を紛らわせる手法などで、広く古典文学中に散見され、神話的とも空想的ともお伽噺的とも思える不思議な内容が、ジャンルを超えて普通に受け止められているものように思われる。これらを仮に幻想構造とも呼んでおこう。この幻想構造の意味については、神話研究、説話研究の領域において、あるいは仏教思想や中国古典の影響を論じる中で、個別の問題についての究明が活発になされてきたことは承知している。しかしながら、ジャンルや物語の内容を超えて受け継がれる幻想構造そのものについて肉迫した研究は、鬼や竜といった個別研究以外には存在しないのではないだろうか。

(2)私たちは、たとえば天馬に乗って時空を超える聖徳太子を、穆王伝説の影響下にあるものと説明し、了解している。典拠の解明ということではそれで事足りるわけだが、何故聖徳太子が天馬に乗って時空を駆け抜ける必要があったのか、太子の異人としての性格を説明する以外に、どんな効果や意味がこの説話にあるのかを、まだ十分には解明し得ていない。出典・典拠を見出すことができる幻想構造が作品に用いられることの意味は何か。いまだ出典・典拠を見出しがたい幻想構造がどのような意味で用いられ、出典・典拠を奈辺に求めることができるか。そのような研究が成果を挙げれば、日本文化の根底にある根源的な思考を論じる上で参考となる可能性がある。

(3)複式夢幻能に代表される能楽作品の幻想構造に慣れ親しんだ本研究従事者にとって、上記の問題は常にもどかしさを伴いながら浮かび出る日本文化の「約束事」のように感じられる。そして、仏教の教義や神道理論を援用しながら、そこにいつも強い隠逸や神仙願望を醸成している日本の古典文学には、非常に多義的で範囲の広い道教的な思考が根っこにあるのではないだろうか。具体的な書名や教義では説明し得ないが、漠然と神仙への憧憬とか、異界への畏怖とか説明してしまう部分を、中国文化の移入・変容と日本古典の継承・発展の両面から細部を綿密に分析していけば、日本文化における道教的な思考をしっかりと把握できるのではないだろうか。

(4)このような漠とした研究を始めるに当たり、研究従事者は文字言語だけに頼る文学研究には限界があるのではないかと思ひ至り、現在伝承されている古典芸能・民俗芸能を、芸能、所作、装束、音楽、詞章のすべてにお

いて、その発生から現在への変容を丹念に推理し、かつそれぞれについて他の芸能や文学作品との影響関係を見据えながら、固有の幻想構造を把握することができれば、その幻想構造の典拠や意味が明らかにできるであろうと考えるに至った。

(5)本研究は、従来の文学、民俗学、神話学、説話学、芸能学の枠内ではなく、芸能の古態を古典の影響から考えようとする点で、極めて斬新であると思う。研究従事者一人の努力では、その全容はもとより本質の一端を探り当てることも難しかろう。しかしながら、現在の古典芸能、民俗芸能のほとんどが室町後期に出現、または大幅な変容を遂げていることを鑑みれば、室町後期の人々の思考を解明することが、幻想構造の解明に重要な手がかりとなると確信している。もとより、幻想構造自体は古代以前から存在するが、室町後期は神話の広がりや頂点に達した時代でもあった。室町後期という時代に限定することで、本研究は期間内に一定の見通しを得ることが可能であろうし、そこに認められる道教的思考の分析を通して、日本文化における道教的思考の解明への糸口もつかめるに違いない。

(6)幸いに、研究従事者は長年にわたって室町後期を代表する能作者、観世信光の作品を研究対象としてきた。信光は、能作者の中でも最も幻想構造を巧みに用いた作者である。本研究では、彼の作品分析を手がかりに同時代の五山・禅林の文学、室町物語などの文学作品、公家や僧侶の日記、舞曲や室町後期に足跡を残す民俗芸能を調査の対象とし、幻想構造に現れる道教的思考の分析を行い、室町後期の日本文化における道教思想の浸透度を調査する。その作業に加えて研究従事者の勤務する広島に根付いた諸芸能の分析を加えれば、諸芸能における道教的要素の分析を通して、各芸能の本質に迫る研究が可能となる。

2. 研究の目的

(1)ほぼ全時代を通して中国をはじめとする海外諸地域から我が国に流入してきた道教的な思想・志向が、日本文化の形成に与えた影響を具体的に解明する。そのための一手段として、我が国で伝存している古典芸能や民俗芸能に含まれる道教的な要素や、それが含まれるに至った要因、経路を調査する。具体的には、能・狂言、浄瑠璃、歌舞伎に代表される古典芸能や各地域に伝存する神楽、田楽、踊り等の民俗芸能を調査し、それぞれ、芸能(形態・所作・音楽等を含む)内容、詞章について、道教的な要素を抽出し、芸能については諸芸能との関係を、内容や詞章については成立当時の思想や文学との関係を探り、その出自や流通範囲を考察する。

(2)日本文化には道教的な要素が多く含まれる。日本文化を形成する思想的な柱というべき仏教や神道でも、教義や儀式から人々の信仰の内面にまで道教的な要素が入り込んでいる。しかし、道教的な要素が思考の中核に位置する中国文化と違い、日本文化において道教的な要素はむしろ思想の外縁に位置するように受け止められている。これは中国文化の日本の変貌の一典型と考えられるが、日本文化における道教的要素の研究は、時代や分野において著しく進展の差異がある。日本文化を総体として捉えようとする時、現在認めることのできる道教的な要素の一つ一つについて、それがいつ日本に入り、どのように変貌を遂げてきたのかを丹念に見定める必要がある。

(3)本研究従事者は、中世日本の文学作品に与えた漢籍の影響の意味を考えてきた。文学作品に表れる漢籍由来の表現や内容が、いつの時代に日本に入りどのような変貌を遂げて姿を現したのか、あるいは新たに流入した最新の知識だったのかを考察し、作品の性格や思想を理解する一助としてきた。仏教思想や儒学思想、または史書、詩文については、すでに多くの研究者により日本文学や日本文化の中で具体的な位置を与えられつつある。しかし、中国文化の中でも混沌としている道教思想については、日本文化に与えた影響の大きさは解明されているものの、日本文化の中での具体的な位置付けがいまだなされていない。本研究従事者は、最近、室町時代後期に観世信光によって作られた能 龍虎 に、後漢末の魏伯陽作と伝えられる丹道書『周易参同契』の影響を認めることができ、蘇軾を初めとする宋代詩人の影響を受けた当時の禅林の道教趣味が 龍虎 成立の背景としてあったことを指摘した(「能 龍虎 の背景 - 禅林の周易受容と神仙趣味 -」、『文学』12巻5号、2011年)。信光の能には、他にも当時の禅林における神仙思想の流行をふまえた 玉井 や 巴園 があり、室町時代後期には神仙思想に根ざした文学作品が輩出している。古代における道教摂取、平安時代に顕著な陰陽道の影響、鎌倉期以降の禅林における宋代言人の影響を受けた道教趣味、さらに江戸時代に見られる明・清の道教文化の流入と江戸文芸への影響と、現代に至る日本文化の形成には、絶え間なく流入してくる道教思想が重要な位置を占めている。

(4)本研究は、伝存する古典芸能、民俗芸能に道教的な要素がどの程度含まれているのか、芸能の種類や発生時期において、道教的な要素の度合いや内容に違いがあるのか、芸能の道教的要素はどこから来ているのかを考えることで、日本文化における道教摂取の実態を解明しようとするものである。芸能を対象としたのは、他の分野よりも道教的要素が色濃く直接的に表現されている点、古代か

ら近世まで幅広い発生時期に分かれている点、広く大衆に普及している点などから、日本文化を総体として捉えるために、好都合であると考えたからである。幸い、研究従事者は能楽を中心とする日本芸能史を研究対象とし、関係する幾つかの学会に所属し、資料を収集する上で有効な手段を幾つか確保している。本研究では、まず、祭文、神楽、能・狂言について、道教的要素の抽出を行い、次に古代日本の歌舞、外来楽舞、風流、念仏踊り、さらに浄瑠璃、歌舞伎などへと範囲を広げ、諸芸能に含まれる道教的要素の概要を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1)室町後期から現在まで存続している古典芸能、民俗芸能の映像と、芸能・所作・装束・楽器に関する情報、詞章等を収集し、その分析を行う。映像資料については芸能・所作・装束・楽器・音楽・詞章の確認と他芸能との比較を行い、詞章については注釈作業を行い、道教的な内容と思われるものを抽出する。

(2)抽出した道教的な内容について、その日本への移入時期、当該芸能に付加された時期、類似の内容との関係を考察する。以上の作業を、能(含田楽曲)、狂言、舞曲、神楽、舞楽等の現存する芸能について行うとともに、これらの芸能に風流・延年、曲舞、白拍子等の現在映像を収集することの困難な芸能も加えて、記録中から芸能・所作・装束・楽器・音楽・詞章を抽出して、道教的な内容の抽出を行い、その内容に同様の検討を加える。

(3)古典芸能、民俗芸能の映像を市販のビデオ・DVD等で収集する。映像が入手困難で現在も演じられている芸能については、実地踏査に赴いて撮影する。

(4)古典芸能、民俗芸能の芸能・所作・装束・楽器に関する情報、詞章等を記した研究書、報告書等を購入する。購入困難な研究書、報告書等については、所蔵する文庫・図書館に赴いて複写・収集する。研究書や報告書の存在しない古典芸能、民俗芸能については、実地踏査に赴いて調査し、映像と研究書・報告書類の記述とを比較して、内容を検証する。

(5)道教の研究書や論文を収集し、我が国に移入された道教的な要素の時代的な措置と我が国における変容の過程を調査する。

(6)上記の作業を実施する中で新知見があれば、口頭発表または論文、報告書にまとめて公表する。

4. 研究成果

(1)能・狂言を中心とした古典芸能・NHK等で放映された民俗芸能の映像を市販のビデオ・DVD等で収集することができた。ま

た、芸能関係、道教関係で購入可能な書籍を、集中して購入することができた。

(2) 芸能の実地踏査としては、三重県磯辺町の伊雑宮田植神事、島根県津和野町の鷲舞、熊本県菊池市の松囃、岐阜県本巣市の真桑人形浄瑠璃、広島県山県郡北広島町の新庄のはやし田、栃木県宇都宮市の宇都宮二荒山神社田舞、和歌山県東牟婁郡那智勝浦町の熊野那智大社扇舞、岡山県岡山市で開催された哲西と神代の太鼓田植及び備中神楽、島根県出雲市の出雲大社「平成の大遷宮」奉祝行事として開催された隠岐国分寺蓮華会舞楽、福島県浪江町請戸の田植踊、岩手県山田町大浦大神楽、島根県益田市石見神楽(横田社中)、広島県廿日市市の厳島神社桃花祭舞楽及び菊花祭舞楽、奈良県奈良市の薬師寺花会式、大分県豊前市の求菩提山国玉神社お田植祭を検分することができた。また、国立能楽堂、喜多流大島能舞台、厳島神社能舞台、九州国立博物館等で能楽や神楽を鑑賞した。

(3) 国立国会図書館、国立能楽堂、東京国立博物館、国立公文書館、九州国立博物館、奈良国立博物館、京都国立博物館、高麗美術館、金沢市立玉川図書館近世史料館、神戸女子大学古典芸能研究センター、国立民族学博物館等、各地の文庫・図書館に赴き、所蔵図書・資料を閲覧するとともに、中世文学会、能楽学会、芸能史研究会、東洋音楽史研究国際シンポジウム、朝鮮通信使フォーラム等の学会行事に積極的に参加し、情報収集に努めた。また、京都市上賀茂神社、廿日市市厳島及び弥山、太宰府市宝満山竈山神社及び宝満山、豊前市求菩提山、奈良市薬師寺初め南都寺院の位置関係等を実地検分し、芸能を含んだ信仰の場の全体を把握することができた。

(4) 平氏政権時代の厳島舞楽について、中央の記録と在地の記録とを比較して得られた知見を、日本音楽学会西日本支部例会で発表することができ、席上で音楽史としても貴重であるとの意見を頂き、継続して厳島の舞楽について調査した結果、以下のように概ねの結論を得ることができた。本研究の実施期間中にまとめることができなかつたが、本年度中に取りまとめて本学の『宮島学センター年報』で発表する。

平清盛が厳島に舞楽を導入した背景には、保元3年(1158)宮中内宴の復興がある。王政復古の立場から信西は、内教坊を復活させて女楽・女舞を宮中や諸社寺で披露した。平治乱での信西失脚により、わずか2年で内宴は廃絶した。清盛はこれを意識して厳島の内侍(巫女)に舞楽を習得させたのだと考えられる。このことは、清盛が交易を通じて宋の制度・文物に関心を抱いていたことと矛盾しない。

厳島舞楽が内侍舞楽から男性神官による舞楽へと変異したのは、御幸を初めとする貴族の厳島詣に従った宮中伶人から男性神官や社家が舞楽を伝習した結果であり、着面する舞楽曲だけでなく、萬歳楽・延喜楽・太平楽などの重要な曲を男性神官が担い、内侍舞楽は五常楽・狛鉾や胡蝶楽・迦陵頻などに固定されたのではないかと考えられる。

(5) 能 船弁慶 の陶朱公故事引用が室町後期に五山禅林で普及した道教趣味の現れであることを突き止め、中世文学会秋季大会で発表し、まとめたものを機関誌『中世文学』誌上に掲載することができた。本研究課題と直結する内容は、以下の通りである。

呉越合戦譚の中でも、西施、范蠡、伍子胥に焦点を当てた説話は、『太平記』『曾我物語』など室町期の作品によく現れる。『史記』から逸脱したこれらの説話は、やがて五山禅僧や中国商人によってもたらされた数多くの逸話の一つではなかつたか。これらの説話に依拠した五山禅林の詩文が多く作られたのは室町後期であり、能 船弁慶 成立の時期でもあった。

西施を媒介とした范蠡像である陶朱公説話は、隠逸と神仙趣味にあふれている。一方、伍子胥の霊が钱塘江大逆流を引き起こしているとする逸話の数々が中国の民間に広まっている。船弁慶 で、嵐とともに海上に出現する知盛の霊には、伍子胥のイメージが投影されている。このように、中国民間説話が室町後期に日本に普及していること、五山禅林の詩文に道教趣味の見られることなどから、室町後期には相当多くの道教思想が日本に伝わっていたと考えられよう。

(6) 当初は網羅的な芸能調査を予定していたが、今日に残る芸能については、やはり中世後期及び江戸時代における元・明・清代の中国文化・思想の伝来・受容から考えることで事足りるという見通しを確立することができた。今後は、宋・元・明・清代の中国における芸能が果たして日本文化に影響を及ぼし得たのかという一点にテーマを絞り込んでいきたい。

(7) 台本・詞章の残る芸能や文学については、五山禅林の詩文や絵画資料を調べることで、多くの成果が期待できる。本研究を推進する過程で、まだ注目されていない文献や絵画資料のあることがわかった。時間を要する作業であるが、禅林文化の所産を詳細に調査していく中で、本研究で得られた芸能資料の蓄積が役立つことを期待している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4件)

樹下文隆、世阿弥と禅竹の片仮名書と平仮名書、京都観世会『世阿弥の世界』、査読無、単行本、2014、pp.27 - 28

樹下文隆、室町後期の能に見る漢籍摂取 - 船弁慶の陶朱公故事をめぐって -、中世文学、査読有、第59号、2014、pp.98 - 107

樹下文隆、中世の巖島と能楽 - 能役者の巖島訪問と島内の能座について -、県立広島大学宮島学センター『宮島学』、査読無、単行本、2014、pp.85-110

樹下文隆、新世代の革新性 - 観世信光 -、中世文学と隣接諸学7『中世の芸能と文芸』、査読無、単行本、2013、pp.238 - 255

〔学会発表〕(計 3件)

樹下文隆、室町後期の能にみる漢籍摂取 - 船弁慶の陶朱公故事をめぐって -、中世文学学会秋季大会、2013、ノートルダム清心女子大学(岡山市)

樹下文隆、《船弁慶》における范蠡説話の解釈 - 《伍子胥》との比較を通して -、能楽学会関西支部六麓会6月例会、2013、神戸勤労会館(神戸市)

樹下文隆、巖島御幸と内侍舞楽 - 都人の記録と在地の記録 -、日本音楽学会西日本支部第12回例会、2013、エリザベト音楽大学(広島市)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

樹下文隆 (Kinoshita, Fumitaka)
県立広島大学・人間文化学部・教授
研究者番号：70195337

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：